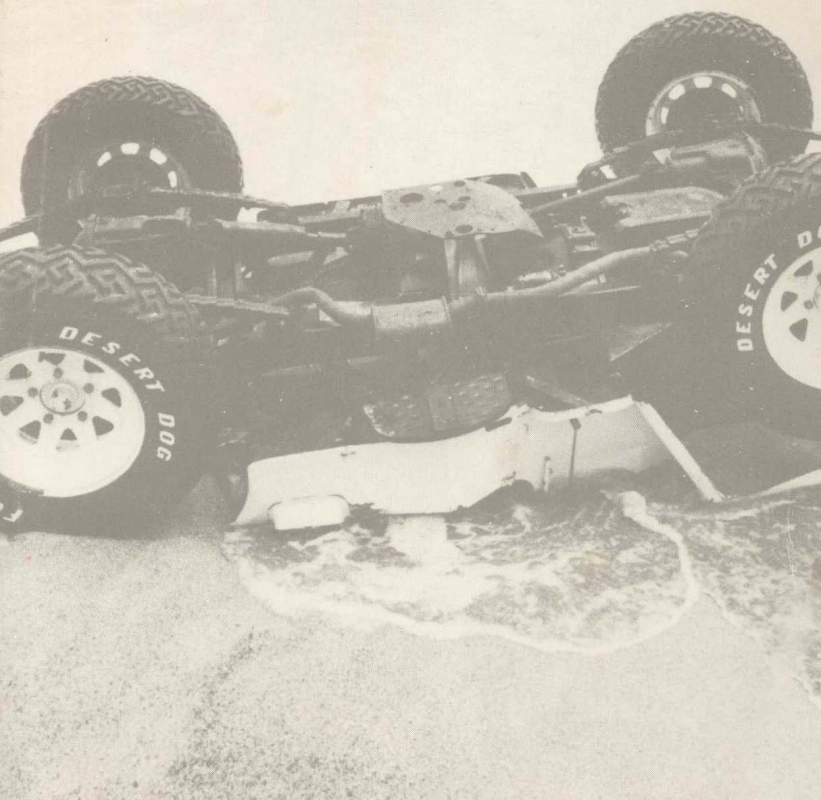


エッセイ・群居せず 丸山健二



エッセイ

群居せず

丸山健二

文藝春秋版

エッセイ・群居せず

1980年5月10日 第1刷

1981年2月5日 第2刷

著者 丸山健二

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23

電話 東京03(265)1211(代)

定価 1000円

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

© Kenji Maruyama 1980 Printed in Japan

エッセイ・群居せず
目次

| | | | |
|----------------|----|-------------|----|
| 雷鳴の真ん中 | 9 | 刺青願望 | 42 |
| 中年のオートバイ | 12 | 失望のシェパード | 45 |
| セントバーナード犬《ソルバ》 | 15 | 盗まれたヤギ | 48 |
| 水呑み作家 | 18 | プレスリーとビートルズ | 51 |
| 宇宙人低能説 | 21 | 殴ってやりたい女 | 54 |
| ママシと私 | 24 | 猟師たち | 57 |
| 美しい山女 | 27 | 作家になって驚いたこと | 60 |
| 映画と拳銃 | 30 | ある夫婦 | 63 |
| 勤め人エレジー | 33 | 怪談あれこれ | 66 |
| 船乗りは男らしいか？ | 36 | ヘリコ襲来 | 69 |
| わが青春のトン・ツー | 39 | 安い元手 | 72 |

旅嫌い 75

ジープと私 78

脱サラの夢 81

砂漠の後遺症 84

若い映画監督 87

○

家賃一万円の別荘 90

一人称のための一ダース 94

未知への逃避 98

不思議な関係 100

私の音楽ライフ 104

なりふりかまわずに 108

ああ、ジョギング 113

○

リンゴと牛乳 116

野鳥あれこれ 119

方言 122

よそ者 125

飽食の時代 128

冬のタイヤ 131

ワカサギ釣り 134

退屈なサイン会 137

| | | | |
|-----------|-----|--------------|-----|
| 健康人間 | 140 | 音楽の効用 | 173 |
| 酒呑みジャンゴ | 143 | 英語再び | 176 |
| 吹雪の埋葬 | 146 | サンドバッグ | 179 |
| 或る夜の出来事 | 149 | 恐怖の女性ドライバー | 182 |
| テレビ離れ | 152 | 死んでいたタヌキ | 185 |
| 皮算用の彼方 | 155 | 仮面ライダーの素顔 | 188 |
| 本カマ、準カマ | 158 | 春の嵐 | 191 |
| グリーン車の受験生 | 161 | 面白い遊び | 194 |
| 火山の歌 | 164 | ○ | |
| クマゴロー | 167 | 珍しい村 | 197 |
| 真冬のラリー | 170 | 白山スノーバー林道を行く | 202 |

新宿24時 215

ロマンなき時代の反逆児 231

アウトドア・ライフのプロたち 243

○

パッド・シチズンは誰か? 254

変な釣り 257

ナイフの思い出 260

パジャマ族 263

ふざけた訪問者 266

パンダと交換 269

雑草退治 272

チュウネンディスコ病 275

メガネマン 278

吹き出す 281

ネズミ 284

狙われている男 287

才能 290

こじつけ祭り 293

ああ、軽井沢 296

死んだふり 299

振りまわされて 302

大いに怪しい 305

| | |
|--------------|-----|
| 森が震える | 308 |
| 作詞家志望？ | 311 |
| 立派なアナウンサー | 314 |
| まともな写真 | 317 |
| 毒キノコ | 320 |
| ピンタ一発 | 323 |
| ランニングパートナーの死 | 326 |
| 山のカモメ | 329 |

エッセイ・群居せず

雷鳴の真ん中

(78・6・4)

そろそろ雷の季節だ。去年はほとんど雷らしい雷がなかったから、今年あたりはひよっとするとひどいかもされない。標高七百五十メートルの土地にあるわが家は、すでに二回ほどあのめくるめく閃光と轟音の洗礼を受けている。周囲が田んぼばかりだから、とりあえずわが家に落ちるしかないのだろう。さいわい被害は大したことがなくてすんでいる。

雷に打たれて死ねたらさぞかし楽だろうと思う。小説家の死にざまとしてはこのうえなく劇的であり、ただそれだけのために、内容はともかく本が売れてくれるかもしれないし、若い女性の読者が墓参りに大勢集まってくれるかもしれない。

ところが甚だ残念なことに、天はどうやらこの私を毛嫌いなさっているようで、頭上を突然覆った炭よりも黒い雲は、いつも私をたっぷりと威すばかりで、さっさと通り過ぎてしまふのだ。おまえのようなら、くでなしを、そうカッコよく死なせてたまるものか、とでも考えているに違いない。

ハイ・ボルテージのおぞましい気配が立ち去ったあと、まだ稲妻がはるか彼方の大気を八つ裂きにし、稜線を闇に浮かびあがらせている頃、深い安堵のため息をもらしながらも、私

は胸のうちでこう怒鳴りちらす。おお、そうかい。そっちがその気なら、こっちにも考えがあるぞ、と。しぶとく、不様に生きのびて、出版社が全集を出すときにうんざりするほどたくさん小説を書きまくって、百歳を越えて、県知事あたりから送られた赤いちゃんちゃんこでも着てやろうじゃないか、と。

私はしばしば雷を小説に使う。雷鳴と稲妻をストーリーの展開のバネとして利用すると、なぜか作品全体がよく引き締まり、完成度が高まるからだ。似たようなことを考える者がいて、これは音楽にも用いられ、たとえばひとつのきちんとしたテーマを持って作られたLPレコードなどでは、曲と曲のあいだを雷鳴でつなぎ、実にいい感じを出している。雨の音を重ねると更に効果的である。

雷鳴の真ん中を通過したことがこれまでに何度かある。ジープやオートバイを駆ってそのただならぬ重い気配を横切って行くときいつも不思議に感じるのは、どうして落雷しないのだろうかということだ。なにしろ私が乗っているのは鉄のかたまりであって、しかもバッテリーも積んだりしているのだから、雷の側にしてみればこれほど落ち易い標的もほかにないだろうに。水田のなかの一本の古釘には落ちるくせに。

マンモス・タンカーに乗ってアラビアまで往復したとき、私は船長にたずねてみた。こんなにも広く、こんなにも平らな空間では、船は雷のいい目標になるのではないか、と。すると船長は、澄ました顔でこう答えた。大丈夫だと言いつつ、落ちてても船底の下は水だから、

アースとしてはこれ以上完璧なものはない、と。なるほどそうかもしれない。では、クルマやオートバイに落ちたという話を聞かないのはなぜだろうか。納得のゆくようにこの説明をしてくれる者に私はまだ出会っていないのだが。

犬を連れて河原でランニングをしているときに雷雲が急速に接近してくると、私はひどく慌てふためいてしまい、どうせ落ちるのなら犬のほうにしてくれと念じ、一目散に家へ逃げ帰る。私は死にたくて困っているのではない。用心に用心を重ねて、逃げに逃げて、まったく予想しないときに落雷を受けて死ねたら、などと虫のいいことを期待しているにすぎない。真冬にたった一発落ちた雷を受けて死んだ村人がいるけれど、まさにその形が理想なのである。

雷を利用して死ぬことは比較的簡単だ。ゴルフ場のような広々とした土地に立って、コウモリ傘でもさしていれば、体の二箇所黒い穴がポツンとあいて、それで何もかもおしまになるはずだ。

中年のオートバイ

(78・6・11)

オートバイは本来おとなの乗り物だ。ガキどものおもちゃではない。おとなとは要するに、ちゃんと働いて家族を養っている男であって、それ以上の条件はない。私は今荒っぽいオフ・ロード用のオートバイにしか手を出さず、単気筒ツー・サイクルのエンジンを脚のあいだにはさんで、北アルプスの山々を走りまわっているけれど、何もこんな乗り方ばかりがオートバイの愉しみ方ではない。排気量50ccの小型バイクのチョイ乗りでも、ナナハンでのツーリングでもかまわないのだ。

ともかく、あれこれ考えこむ前に乗ってみることだ。若い頃さんざん乗ったからもういいと言う者でも、三十歳を越えてからあらためてオートバイにまたがれば、ふたたび青春の緊張が甦って、いつしか複雑きわまりない対人間関係の真ただ中に身を置いてすっかりくたびはてている自分に気がつき、忘れていた冒険心を思い出すかもしれないではないか。また、初めて乗る者は、確実にひろがる世界と新しい自分を発見するだろう。エンジンを回し、ハンドルを握って、わずか数十メートル走った途端に肉体のあちこちが熱くなり、更に数キロも走れば家庭や会社や親戚や定年といった数々のしがらみがいとも簡単に消滅するのがは

つきりと自覚できるだろう。もちろん錯覚だ。だが、これまでそれほど素晴らしい錯覚を味わったことがあるというのか。

暖かい春の風が吹く満月の夜に、こっそりと出発しようではないか。眠っている家族を起こさないようそっと家を出て、爆音が聞えないところまでオートバイを押しに行き、それから海へ向って一気に突っ走るのだ。スカッとする時間があるか彼方までつづいているではないか。だからといって、乗用車を使ってそっくり同じことをしてもまったく意味はない。四輪はまずい。四方を窓に囲まれて、転倒の心配がほとんどないような乗物は、買物か通勤か商用か家族旅行にでも使えばいい。

オートバイの魅力は全身で風を感じることにほかに、マシーンといっしょに体を傾けてやらなければカーブを曲れないことにある。これぞまさしく独立の精神にほかならない。誰の力もあてにならないことをたっぷりと思ひ知らされるだろう。居眠りする余裕はない。

走りながら大声で笑ってやろうではないか。うじうじしていたこれまでの日々を、いつもの酒場で、いつもの女にチョッカイを出し、いつもの連中と愚痴のこぼしっこをしていた自分を、嘲笑ってスロットルをいっぱい開けようではないか。ついでにローンの数々と、皮下脂肪も笑ってやろう。言葉にしがみつき過ぎていた生活もだ。

群れなければ一メートルも走れないような、オートバイを取り上げられたら何も残らないような暴走族とすれちがったら、こう罵ってやろう。「ノータリンのチンピラ野郎め！」そ

して、一台数百万円もするハーレー・ダビッドソンにまたがった成り金の連中を見たときには、こういつてやろう。「これはまあびっくりした。移動式のキャバレーでもできたのかと思いましたよ」

オートバイに乗ってみてわかるのは、警官の横暴さだ。口のきき方からして違う。「おい、どこへ行く？」警官はあなたの免許証を見て、おそらくこう呟くだろう。好きなんですねえと。しかし、その言葉の裏には、いい歳をして、という意味がこめられている。だが、気にすることはない。いい歳をしてお巡りさんごっこなんかして、と小声で言い返せばすむことなのだから。

さあ、海だ。潮の香りと波の音だ。人生？ そんなものは二本のタイヤで踏みつぶしてしまえばいい。女房や息子？ 張り倒しておけばいい。